体育学研究 44：42-46，1999

科学論から見たスポーツ科学の〈内〉と〈外〉

樋口　聡

The "inside" and the "outside" of sport science: A consideration from the viewpoint of the philosophy of science

Satoshi Higuchi

I　科学論という企て

(1)　問題の背景[注1)]

50周年を迎えつつある日本体育学会は，今，転換期にある．その背景には教育改革の大きな動きがある．数年前に大学設置基準が大綱化され，体育実技が大学の必修科目である必要はなくなった．その結果，大学の体育実技科目が一斉に姿を消すなどということには今のところなっていないが，この変革の意味はやはり大きい．戦後の新制大学の発足とともに大学体育が必修化され，それに伴う動きの中でこの学会が誕生したことを思えば，必修の規制の廃止は，一つの時代の終わりを暗示するものであろう．また，小・中・高校での完全週五日制の導入に伴う教科の時間数の削減，さらに，総合学習などの従来の教科の枠を崩す方向への学校教育の進展は，「体育」という教科の様相を変える可能性を秘めている．教科の様相が一変すれば，体育学/スポーツ科学[注2)]という学問を支える基盤も変化するに違いない．というのは，それらの学問の担い手の大半は，小・中・高校の教員を養成する大学の課程に所属する大学教員か，あるいはつい先ほどまで必修であった体育実技を担当する大学教員であるからである．スポーツ科学が教育の問題からいかに遊離していっても，現行の制度のもとでは，学校の教科の問題から逃れられないのである．

ここに企てられるのは，このような現実に直面しつつ，スポーツ科学/体育学をめぐってなされる学問論の一つの展開である．

(2)　科学についての問い

「科学とは何か」と問うてみたとき，以下の三通りのような仕方で問題を捉え，答えてみようとすることができるだろう．

第一は，すでに存在している「科学」について，その概要を理解する知識として，上の問いに答えることである．例えば，「科学」という言葉の語源や歴史的な発展の経緯，体系的な知識を生み出す方法の性格，形式科学—実質科学，自然科学—精神科学といった科学の分類などをめぐる理論に基づき，一定の科学像を構成しようとする試みである．

そのような科学の第一段階の理解を踏まえ，人間にとっての科学の意味や意義そして価値の問題も含めて「科学とは何か」を問うことが第二の試みとして考えられる．科学は技術と結び付いて現代社会の重要な構成契機となっているが，環境破壊や生命倫理の問題などさまざまな難問を人間に突き付けてもいる．「科学は本当に人間を幸福にするのか」といった問題意識のもとで「科学とは何か」を問うことが可能であり，それは科学を相対化してなされる科学批判となる．

その科学批判の延長上に，科学とは異なると従

広島大学教育学部
〒739-8523 広島県東広島市鏡山 1-1-2

Hiroshima University, Faculty of Education,
1-1-2 Kagamiyama, Higashi-Hiroshima, Hiroshima 739-8523

来見なされてきたさまざまな人間の営為や多様な「知」との関連や融合のもとで科学が見直されるとき，新たな科学の姿を求めて「科学とは何か」が問われうる．その問いは，「学問とは何か」「知とは何か」を同時に含意し，われわれの知識観，人間観，世界観の問い直しともなる．「科学とは何か」をめぐる問題の第三の審級である．

(3) スポーツ科学論の意味

以上の問いの広がりの全体を，科学論の企てとして理解することができる．この科学論の視点でスポーツ科学について考察することが「スポーツ科学論」である．そこにはスポーツ科学に対する自覚的な反省のまなざしがあるが，そのようなまなざしは，これまでもいくらか存在している．例えば，上記の第一段階の科学への問いは，スポーツ科学を学問として自立させようとする際に必ず問題にされることであり，スポーツ科学の体系化の試みなどがそれに当たるだろう．また，第二段階の問いへの対応は，スポーツや人間に対する自然科学一辺倒の見方への批判といったかたちで知られるところである．

さて，われわれは第三の問いを問うことができる位置にいる．仮にそれを学問論として展開させるとすれば，単に自然科学的な研究だけでなく，スポーツをめぐる哲学，歴史学，社会学などの知もまたその視野において問題にすることができるであろう．あるいは，体育学といった学問の制度や体育学会という学会のあり方を問うこともできるに違いない．

Ⅱ 〈外〉からの視点

スポーツ科学論の展開には，さまざまなアプローチが可能である．ここでは，スポーツ科学の〈内〉と〈外〉について考察し，スポーツ科学の研究者の立っているポジションについて考えてみることにしよう．

(1) 〈内〉―〈外〉図式の多義性

或るものごとを他のものごとから隔てる境界線が引かれるとき，そこに〈内〉と〈外〉が生まれる．何も書かれていない白紙に，丸を一つ描いてみよう．たちどころに丸の〈内〉と〈外〉が誕生するわけである．その円で囲まれた領域を「スポーツ科学」と呼んでみる．スポーツ科学の研究者とは，この円の内側にいて，スポーツの研究をする人々である．

この単純な図式は，単純なるがゆえに多義的に機能してしまう．上記の内部―外部といった空間論的な位相がまずは考えられるが，共同体を構成する個人のレベルに着目すれば，それはいわゆる主観―客観図式という認識論的な位相となる．そして，この〈内〉―〈外〉が intrinsic-extrinsic と言い換えられるとき，〈内〉が「本質的」と見なされる価値論的な位相が出現する．

(2) スポーツ科学の内部を構成する「体育人」のエートスとスポーツ科学のパラダイム

「体育学」と重なりながらも，確かにスポーツ科学と呼ばれる学問はすでに存在していると言うことができ，この領域を浮き彫りにする境界線を何らかのかたちで描くことができるだろう．最も簡便な線引きは，学会という組織への参加の有無を基準にすることである．体育学会をはじめとするスポーツ関連諸学会への参加者たちが，他の学問領域と対応しつつ，スポーツ科学を自立させるべく努力し，境界線の内部で研究活動に従事してきた．それを支えてきたのが「体育人」というエートスである．

この「体育人」というカテゴリーとエートスは，随分古くからあったに違いない．その重要な特徴の一つは，彼ら彼女らがたいていの場合，何らかの運動競技すなわちスポーツに堪能で，程度の差はあれそれを愛好しそれに没頭して青年時代を送った人々であることだ．スポーツの熱狂的な愛好者は世に多いであろうが，そのような若者の一部が大学の「体育」に進学してくる．かつてはその受け皿が高師の体育科だったりしたのだろうが，新制大学の設置とともにその受け皿は増強されることになった．体育学会の設立とともに，そのような「体育人」が「研究」に従事しなければならなくなった．そこでの体育は教育概念に限定され

るのではなく，スポーツをもめぐる諸問題であるのは必然であった．

加藤橘夫が「体育の研究は，そのテーマを選ぶ時，体育を良くするという目的の意識が必要となる」(9) pp. 163–164）と述べたように，研究の中身はさまざまであっても「体育を良くするという目的」を持った同じ「体育の仲間」だという意識が体育学/スポーツ科学の境界線の内部を維持してきた．その境界線が明瞭になればなるほど，それはその内部の人々を他の領域から区別して保護する見えない壁としても機能する．と同時に，境界線の内部に対する〈外〉からの視点も生み出す．

その〈外〉からの視点に立ったとき，「体育人」のエートスを，トーマス・クーンの言う「パラダイム」として理解する可能性が生まれる．クーンによれば，パラダイムとは，「或る集団の構成員によって共有される信念，価値，技術などの全体的構成を意味する」(10) p. 198）．クーンのパラダイム概念は決して一義的ではなく，さまざまに拡大解釈される可能性あるいは恐れを孕んでいるが，それを理解した上で，「体育人」のエートスをパラダイムとして捉えてみることができるだろう．それによって，体育学/スポーツ科学も含めた科学が一つのパズルであることが見えてくる．パラダイムは通常自覚されることは稀であるが，それが気づかれ意識されるとき，その科学は「危機」を迎える．おそらく，体育学/スポーツ科学という学問は，今，その「危機」に直面しつつあるのではないか．

「危機」に面して生じるのがパラダイムの変換であり，それは言わばゲームのルールの変更である注3)．そこで予想されるのは，「体育を良くするという目的」のもとに集おうとするあのエートスへの疑問視であり，個々の研究者の研究の高度化とともに，体育学/スポーツ科学の内部を一体のものとして繋ぎ止める粘着力の弱体化である．

(3) スポーツ科学の外部の学問の状況

スポーツ科学の境界線をできるだけ太く描き，また他の領域との壁をできるだけ高く築き，その内部に関係者だけで閉じこもることは，いろいろな意味で不可能である．スポーツ科学は学問として充実しているのか否か，その独自性やアイデンティティをどのように主張できるのか，これらの問いに答えようとすれば，他の学問との比較や他の学問との関係を問題にしないわけにはいかず，必然的に〈外〉からの視点が要請される．

例えば「美学」と「教育学」を見てみよう．これらの学問もまたそのパラダイムの転換期を迎えている．哲学と同様美学もまた，日本においては，西洋のそれに学び，西洋学的な学問として発展してきた．それはすでに世界的な水準に達しているといっても良いだろう．しかし，日本を代表する美学者の一人である佐々木健一は，「われわれの美学は成熟に遠い」(14) p. v）と言う．要するに，われわれがわれわれの問題と言えるものを，われわれの生活と文化の中から獲得し，それに対して美学の議論はなされるべきなのであって，これまでの美学という学問は必ずしもそうではなかったというのである．また，教育学，それも教育哲学の領域において，教育学への自己反省すなわち教育学批判が，理論的なレベルですでに本格的に展開されようとしている．意味生成の教育人間学を標榜する矢野智司は，「教育学は教育を妨げるものを教育の外部に見出し，それにたいして批判を加えてきた…．しかし，教育という原理の正当性は自明なことなのだろうか」(15) p. 174）と問う．ここでの「教育」を単純に「体育」に置き換えてみよう．そうすれば，体育学もまた体育を妨げるもの（者）を体育の外部に見出し，それに対して批判を加えてきたのではないかと問うことができるだろう．「体育を良くするという目的」を言う前に，そもそも体育の正当性，自明性が問われなければならないのである．

(4) 脱領土化と学際性

〈外〉からの視点でスポーツ科学を見渡してみたとき，その領域の広がりが確かに確認できるが，その自律性を言うためにスポーツ科学の研究対象や研究方法の独自性が主張されることがある．それを端的に主張しようとすれば，スポーツ科学とはスポーツに関する独自の科学としてスポ

ーツ研究を独占することが考えられる．スポーツ科学はスポーツというフィールド・対象を，言わば領土化しようとするわけである．

そのような試みは不適切であることを，ノルベルト・エリアスは指摘している．エリアスは，「現在，あたかもスポーツが社会の他の諸様相から独立して存在するかのようにみなし，スポーツ社会学を自律化させようとする傾向が強まっている．たしかにスポーツは，労働，産業，科学などと同じで，それ専門の社会学（スポーツ社会学）の対象である．そのかぎりで，スポーツは，ある程度の自律性を持つ」と述べる．しかし，現実のスポーツは，現代社会の端的な現れであり，それゆえに，現代社会の現出するその他の多くの事象との関係でスポーツは理解されるべきであり，その自律性は相対的なものである([1] pp. 122–123)，と言う．

また，ジョン・マカルーンは，スポーツや体育の関係者の学問に対する態度の閉鎖性を辛辣に批判する．スポーツや身体について学問的な関心を持っている人々は，いわゆるスポーツや体育の関係者だけではないのであり，そこに親密な学問的交流があって然るべきなのに，スポーツや体育の関係者はそれを避け，「人格形成」「自己陶冶」「健全な身体に健全な精神」「フェアプレイ」などの心地よいイデオロギーで学問的営為をごまかしている（[12] pp. 230–231)，と言う．

他者との対話によってはじめて開かれるモラルの問題からしても，学問領域や対象の特権的な領土化の発想は明らかに不適切であろう．となると，すぐに出てくるのが学際性といったキャッチフレーズである．しかし，真の意味での学際性とは，異なるパラダイムの理解を前提にするのであり，科学論の野家啓一が指摘するように，異なるパラダイムの理解のためには自己のパースペクティヴからそれを解釈することしかなく，そこでは解釈するものと解釈されるものとの地平のぶつかり合いが必然的に生じる（[13] pp. 128–129)．このような地平の衝突と融合を引き受ける覚悟が，学際性のためには求められるのだ．

(5) 物語としての学問/科学

さて，われわれは新たな科学の相貌をうかがう第三の審級に立つのであった．科学の新たな相貌，その一つの姿が，「物語としての科学」である．「科学的知」と「物語的知」の二項対立とヒエラルキーを無効化し，その境界線を不明瞭化するとともに，「科学的知」を多元的な「物語的知」の一形態と捉え直すことを，野家は主張する．そして，その結果，近代以降「科学的知」に刻印されてきた聖痕は剥ぎ取られ，「科学的知」は数ある「物語的知」と並存すべき近代に特有の一つの「語り」として位置づけられるだろう（[13] p. viii)，と言う．いかに精密な実験器具を用いてなされる科学研究であっても，それは或る種の物語を含んだ一つの語り（narration）なのである．

ところで，教育学者の佐藤学は，いわゆる知識の習得を中心に据えた学習観を相対化する中で，教育における理論と実践の関係を新たに構築しようとする．それは，実践へと応用されるべきものとしての理論とか実践の典型化としての理論といったように理論を捉えるのではなく，理論とは思考と活動の枠組みを与えるフロネーシス（賢慮）であるとする．そこに生み出されるのが，実践的ディスコースである．そして，研究内容の表現（すなわち研究論文）の基礎にあるものは，実践の特異性を普遍的（＝脱領域的）言語で記述する「物語的認識」である（[5] p. 278)，と言う．この佐藤の考え方は，理論—実践関係の問題を新たに捉え直すための一つの示唆となるであろう．

(6) 〈外の思考〉

スポーツ科学に対して〈外〉からの視点を意識的に導入することによって，さまざまなことが見えてきただろう．重要なポイントの一つは，スポーツ科学/体育学という学問にせよ，それに直結する学会にせよ，制度的なシステムにしかすぎない，ということである．それ自身で自律するような，また永遠なる制度などはありえないのであるから，社会や時代の流れとともにその制度の内実も変容するであろう．もちろん，時には流れに逆らって守らなければならないものもあるだろう．

しかし，それが何であるのかは決して自明なことではない．ただ，それが固定化された実体的なものでないことは確かである．現行のスポーツ科学/体育学という制度を実体化することは，その外部をも実体化することになる．そのような実体化が不可能であることを示唆する言説を，最後に引用して示すことにしよう．おそらく，われわれ個々人に求められることは，〈内〉―〈外〉図式を無効にするような振る舞いであり，一つの場所に安住することを多様なかたちで放棄しうる感性であろう．

「外部というのは…内部の自己限界の意識としてしか表れてこない….」(11) p. 143)

「あらゆる主体の外に身を保って，いわば外側からその諸限界を露呈させ，その終末を告げ，その拡散を煌めかせ，その克服しがたい不在のみをとっておく，そんな思考…．この思考は，《外の思考》と呼び得るものであろうものを形成している….」(2) pp. 16–17)

注

注1) 文献の樋口[3,4,6-8]を参照のこと．

注2) 本稿では基本的には「スポーツ科学」が考察の対象であるが，文献の樋口[3,7]で指摘しているように，これまでの「スポーツ科学」は「体育学」と不可分の関係にある．「体育学/スポーツ科学」という表記は，「体育学あるいはスポーツ科学」を曖昧に意味している．また，文脈に応じて「スポーツ科学/体育学」と表記されたり，「スポーツ科学」「体育学」が単独で使われたりしているが，そこに明確な概念の使用上の区別を想定しているわけではない．曖昧な現実をそのまま指示しているわけである．

注3) 学問を一種のゲームとして捉える理解は，マックス・ウェーバー[16]にも見ることができる．ウェーバーのいわゆる「価値自由」(Wertfreiheit) という概念も，ゲームとしての学問というコンテクストで読み直すことができるのではないかと筆者は考えている．

文　献

1) エリアス：桑田禮彰訳 (1986) スポーツと暴力．栗原彬ほか(編)身体の政治技術．新評論：東京，pp. 93–130.

2) フーコー：豊崎光一訳 (1978) 外の思考．朝日出版社：東京．〈Foucault, M. (1966) La pensée du dehors. Critique. No. 229: 523-546.〉

3) 樋口　聡 (1994) スポーツ科学論序説(Ⅰ)：序論．広島大学教育学部紀要 (第二部) 43: 135–144.

4) 樋口　聡 (1995) スポーツ科学論序説(Ⅱ)：イメージの生成―わが国におけるスポーツ科学の誕生―．広島大学教育学部紀要 (第二部) 44: 113–123.

5) 樋口　聡 (1997) 現代学習論における身体の地平：問題の素描．広島大学教育学部紀要 (第一部教育学) 46: 277–285.

6) 樋口　聡 (1998) 学校体育の独自性とは何か？なぜ独自性を問うのか．学校体育 51(3): 42–43.

7) 樋口　聡 (1998) スポーツ科学論序説①～④．体育科教育 46(6, 8～10): 62–64, 57–59, 51–53, 54–56.

8) 樋口　聡 (1998) 学問と教育のポリティクス―日本体育学会の道程と学校体育．体育科教育 46(17): 164–167.

9) 加藤橘夫 (1956) 加藤橘夫著作選集第一巻 (1985)．ベースボール・マガジン社：東京．初出は体育の科学1956年1月号．

10) クーン：中山茂訳 (1971) 科学革命の構造．みすず書房：東京．〈Kuhn, T. S. (1970) The structure of scientific revolutions. Second edition. University of Chicago Press: Chicago.〉

11) 栗本慎一郎・笠井　潔 (1978) 闇の都市，血と交換［経済人類学講義］．朝日出版社：東京．

12) MacAloon, J. J. (1991) Memory, attention, and the communities of sport. Andre, J. and James, D. N. (Eds.) Rethinking college athletics. Temple University Press: Philadelphia, pp. 223–237.

13) 野家啓一 (1993) 科学の解釈学．新曜社：東京．

14) 佐々木健一 (1996) 美学における感性・身体・共同体―第46回美学会全国大会におけるワークショップの論集―．東京大学美学藝術学研究室：東京．

15) 矢野智司 (1996) ソクラテスのダブルバインド―意味生成の教育人間学―．世織書房：横浜．

16) ウェーバー：尾高邦雄訳 (1980) 職業としての学問．岩波文庫：東京．〈Weber, M. (1919) Wissenschaft als Beruf. Max Weber Gesammtausgabe (1992). J.C.B. Mohr (Paul Siebeck): Tübingen.〉